

02-013

小児病棟の観察室における術直後の患児に付き添う親の現状

濱穂香、森田里奈、羽場美穂、古保志保

石川県立中央病院

【目的】 小児病棟内に設置している観察室の運営において、手術直後の患児に付き添う親の現状を明らかにする。

【方法】 A病院小児病棟にて予定手術後に観察室へ入室した患児に付き添う親を対象としアンケート調査を行った。観察室滞在中の環境や医療者の対応、付き添いへの思いなど4段階と自由記載にて回答を得た。

【結果】 各質問項目に対し「そう思う・すごく思う」と回答したのは「ナースステーションに近く安心」が98.0%「医療機器の音が不安」が29.4%「看護師の訪室回数は適当」が90.2%「看護師がそばを離れるのは不安」が15.7%「観察室で付き添えて安心」が96.1%「術後合併症への不安」が49.0%であった。また、各質問項目についてスピアマンの順位相関係数にて検定を行い「医療者の迅速な対応」と「患児が家族に付き添って欲しいと思っていると感じた」($r=0.541$)に相関が認められた。

【考察】 観察室の環境について、ナースステーションに近いことに安心感を得ている一方、医療機器の音に不安も感じており、非日常的な環境が親に与えるストレスは大きいと推測される。また「暴れていると他に迷惑がかかる」という同室者を気遣った自由記載もみられた。医療者の対応として、看護師の訪室回数には満足しており、患児の状態に合わせた訪室が求められていた。また看護師がそばを離れている間、親は自分が医療者に代行し患児の異変にいち早く気づかなければならないという思いを抱え、不安を感じていると推測された。しかし、小児病棟では医療の代行者としてではなく患児にとっての安全基地として親の付き添いを勧めており、親が付き添いの意義を理解できるような医療者の説明や関わりが必要だと考える。また、検定結果から医療者の迅速な対応と、我が子から必要とされている、支えになっているという親の実感には関係があると推測される。また、親は観察室で家族が付き添えることに安心したと肯定的に受け止めており、全員が無事手術が終ったことに安心した、そばにいたことができて嬉しかったと回答しており、親が術後すぐに自分の目で児の状態を把握することは安心感に繋がり、観察室での付き添いが親の不安を軽減すると示唆される。しかし、約半数がこれから起こりうるさまざまな合併症や副作用について不安を抱いていたことから、看護師は親がそのような安堵と不安が入り交じった思いであることを理解し、寄り添っていく必要があると考える。

02-014

慢性疾患を抱える小児の内服に関する家族への調査

松本侑華、村山有利子、鈴木さと美、加藤智子

社会福祉法人 聖隷福祉事業団 聖隷浜松病院 C7病棟

【背景】 内服は侵襲が少ないように見えるが、「のむ」という主体性がなければ小児にとっては非常に苦痛を伴う。過去の研究では、保育園に通う小児の母親による内服援助の実態調査、小児が内服を嫌がった時の母親の気持ちに関する調査、急性期に一時的に小児が内服をする母親への調査はあるが、慢性疾患を抱え継続的に内服を続ける小児の親に対する研究はない。

【目的】 慢性疾患を抱える小児の内服の状況や親の心理状態を明らかにし、看護師としてどのような介入ができるかについて検討した。

【方法】 研究対象者：慢性疾患を持ち、条件をすべて満たした小児の親（経口にて内服を30日以上継続していること、家族が内服に介入していること、1種類以上の内服をしていること）17名であった。データ収集方法：自記式質問紙によるアンケート調査を行った。分析方法：数値の部分は単純集計及び統計的に分析した。記述の部分はコード化し、内容の類似性に沿ってカテゴリー化した。倫理的配慮：A病院臨床研究審査委員会の承認を得て実施した。(No.3138)

【結果】 アンケートの回収率は100%であった。小児の年齢は0歳が4名、1歳が4名、2歳が5名、3歳が3名、6歳が1名であり、小児の疾患は心疾患9名、血液疾患2名、てんかん2名、脳外科疾患1名、アレルギー1名、ミトコンドリア病1名、内科的疾患1名であった。薬を飲ませなければならぬことに対する親の思いは、「仕方がない」「納得して飲ませている」「飲ませることに負担感がある」「長期的にみると不安がある」の4つのカテゴリーに分類できた。8割の家族が小児に内服を拒否された経験を持ち、無理矢理内服させた経験がある家族も半数以上いた。無理矢理薬を飲ませたときに抱える親の思いには「申し訳ない」「辛く悲しい」などがあった。普段の内服方法は「水に溶いてスポイトで飲ませる」「スプーンで飲ませる」が多かった。また、「粒が残らない溶かし方をする」「混ぜ方や口に入れる場所、1回量を工夫する」「褒める声かけをする」など、年齢や内服薬の種類や特徴を考えた工夫を行っていた。

【考察】 内服支援の際には小児の様子や成長発達に合わせた方法の提案が必要である。また普段の内服や拒否する児に無理矢理内服させることは、児と親の双方にとってストレスであると推察される。そのため親の抱える気持ちをくみ取り、親と一緒に内服方法を検討することが必要だと考える。